

# Segovia と語る

オルケストル「エトワール」

河 合 博

伯林で発行されるギター雑誌「Die Gitarre」の昨年の拾一月拾二月號に巴里の或る批評家とセゴヴィアとの對話が載つて居る。セゴヴィアが藝術家として發展した経路も窺はれて面白い記事であるから譯す事とする。

## ◎藝術家としての第一歩

今年三拾一歳である Andres Segovia は Granada で生れた。音樂家としての第一歩を踏む事は彼にとつて非常に困難であつた。其れは當時彼は家庭の逆境と闘ひ且つ藝術家として發展する爲には多くの障害を排除して行かねばならなかつたからである。彼がギターを研究し、此の通俗的な輕蔑された樂器を世人の忘却から救出して最も高尚な樂器とする爲に彼が如何に努力したかを私は彼に尋ねたセゴヴィアは答へて曰く。

私の第一歩は非常に妙でした。實際私は前からギターに運命付けられて居たかの様でした。一体どう言ふ見えない力が私を斯くも力強くギターに引付けたのか其れは私自身にもわかりません。十四歳の時私は歌劇場で歌ひ手が自分でギターで伴奏するのを聴きました。其の時私はギターが如何に不思議な力を持つて居るかを知り、ギターの研究を始めたのです。私は第十六世紀と第十七世紀の古い樂曲の中からギターに適するものを探出し、Milan や Valdeirabano が「vibuela」（西班牙人の古い樂器で、リュートに相應するもの）の爲に書いた作品を編曲しました。次に第十九世紀初頭の最も優れたギター作曲家である Ferdinand Sor を研究し、最後に Bach を研究して Bach がリュートの爲に書いた作品をギター用に編曲しました。私は私の努力が成功の王冠を捷ち得た事を非常に喜んで居ります。其れはギターがリュートよりも無限に優れた樂器であるからです。斯うして倦む事の無い熱心さで四年間研究した後、家族や友達に見離され輕蔑されて、まるで僧侶の様に孤獨になつた私は今こそ目的を達したのだ、自分の作品を(まだ故障は多いだらうが)世に發表する事が出来るのだと信じました。

## ◎ 最初の成功

私は當時拾八歳でした。Madrid には學校に私の友達が居ましたから、私に彼等に頼んで私の最初の公開演奏の援助をして貰ふ事にしました。それでも多くの反對に打勝たねばなりません。と言ふのは當時ギターはごちらかと言へば凡俗な低級な人々の間にだけ持囃されて居ただけで一般的には決して高い尊敬を受けては居なかつたからです。一般の人々はギターの様な通俗樂器を藝術的に取扱ふのは馬鹿氣た高慢な事だと思つて居たのです。然し私は幸運でした。此の最初の演奏會は學校で開催されましたが、一つの小さな革命を惹起しました。殊に音樂家達は非常に驚嘆しました。人々は遂に始めてギターが藝術的に第一流に位する音樂的樂器であると言ふ事を悟りました。四年間私と往來を絶つて居た私の家族や私の友達は再び私と仲直りしました。又多くの西班牙の都市は私を演奏會に招待しました。此が私の最初の成功でした。

現代の作曲家達も私と交渉を持つに至りました。佛蘭西人では Albert Roussel, George Migot. 西班牙人では de Falla, Turind Salazar, Espla が私の爲にギターの曲を作曲して呉れました。斯うして居る間も私は怠まけては居ませんでした。自分の藝術を完全なものにする爲にしなければならぬ事がまだ澤山有りました。初めは自由な滑らかな演奏をするのが非常に困難でした。其れが濟むと又一つの問題が有ります。即ち、ギターは常に三部ではなく四部の和絃を用ひました。然し現代の音樂の爲には私は此の和絃法を變えなければなりません。私は自分の技巧を昔の和絃に合はせ、其れに熟達した後、其れを新しい和絃に應用する事が出来ました。要するに私はギター藝術を現代に適應せしめ又其れを現代音樂の表情形式に適當なものとしやうと試みたわけです。

## ◎ セゴヴィアの意圖

私は各地で受けた待遇に關して非常に快感を持つて居ります。又音樂家が一般に閑な時には彼等は私の演奏會を聴きに來ます。そして作曲家も愛好者も専門家も凡てギターの力に感動します。又多くの作曲家は私の爲に急いで曲を書いて呉れます。私は彼等に大いに感謝しなければなりません。然し乍ら不幸にして彼等は餘り一般的に作曲し且ギターの技巧を餘り顧慮して居ない様に思はれます。私は此頃ギターと他の樂器とを結び付ける方法を發見しやうと努力して居ます。ギターは其の快よい響きと其の色彩の

點に於いて他の凡ての樂器よりもずつと柔かい性質を持つて居ります。ギターは夫れ自身に於いて既に小さなオーケストラであります。私はギターとヴァイオリン及びフルートの結合は優れた効果を生ずる事を確信して居ります。Falla は既に此種のオーケストレーションを書いて居ます。

(今後の豫定に就いてセゴヴィアは次の様に答へた)

私は演奏會後巴里を去り、ポルトガルで數回演奏會を開き、それから再び巴里に歸り裝飾藝術博覽會の西班牙館で數回演奏します。秋にはヴェニスに行き國際室内樂祭に参加する筈です。それから南米及び北米に演奏旅行をします。

然し其の前に (セゴヴィアは笑ひ乍ら附加へた。) 妻と子供二人を連れて Bretagne の海濱に行き休養する積りです。私も随分多忙ですからね。

……(一九二七・二・一一譯)……

---

## トレモロとスタッカート に就いての或る考察

・ 同人 宮田政夫

その一

マンドリンのテクニクに於て、トレモロとスタッカートが、その重要な二大要素であることは論を俟たないことであるが、これが二大要素であり生命である以上、その奏法、用法には深甚の考慮を要するものである。スタッカートの用法(奏法に非ず)に於いては奏者の充分な努力と音樂的教養とに依つて、その技能を進展さすことも出来るけれど、トレモロに至つては、ある程度以上は大部分その人の天才的の努力に俟つ外はないと言つてもあながち過言ではない。従つてトレモロには同一の教師に就いた十人の奏者を見ても全く十人十色と言ふことが出来る。彼等が始終、同じ教師のトレモロを聞き同じ教師に教示を享けながらも、而かも斯くの如く相異なる理由は勿論、手首の運動、その振り方に依つて生ずる運動の遲速、ピックの持ち方及び絃に對するピックの角度、即ちトレモロを奏するに當つて最も重要なことで、此の上述の諸點の相異から起る問題である。